

アルパインクラブ名誉会員 - 英国の登山界とアメリカ山岳会

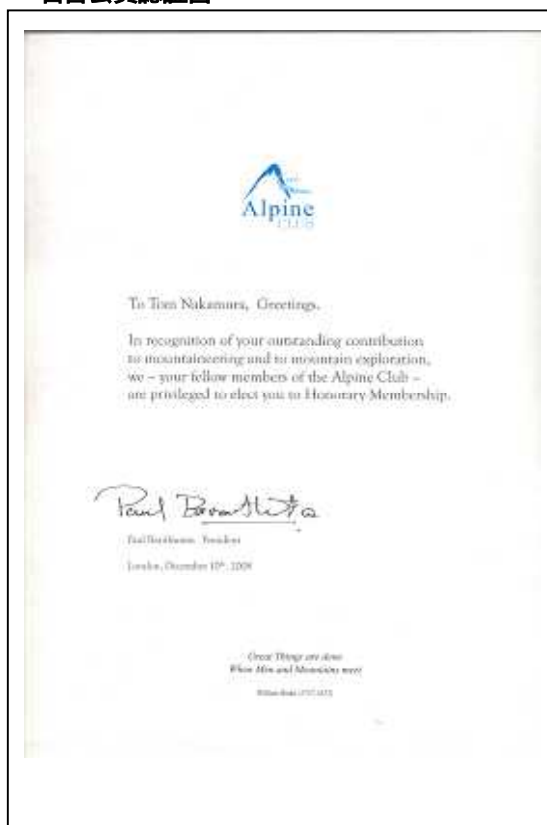
中村 保

英国アルパインクラブの月報 2009・四月号に、『大岩壁の50年』のイタリアのリカルド・カシンが2009年度の名誉会員に推挙され、その認証式に息子さんのギド・カシンが代わって出席すると報じられた。カシンは1909年1月生まれ、100歳の長寿を祝うに相応しい配慮である。1938年、アルプス最後の三大北壁の一つ、グランド・ジョラスのウォーカー稜をカシンは初登攀し一躍名声を高めた。1945年にガストン・レビュファが第二登に成功、彼の『星と嵐』は戦後の日本登山界を大いに刺激した。RCC が創設され、先鋭的なクライマーを穂高岳、劔岳、後立山、谷川岳のより困難な冬季登攀に向かわせた頃である。スーパー・アルピニズムを標榜して連続登攀を実践した。今で言うアルパイン・スタイルの先駆けだった。私自身も奥山章、芳野満彦、一橋大山岳部の先輩・甘利仁朗らとRCC に参画した懐かしい思い出がある。

2007年は同じイタリアのワルテル・ボナッティが、77歳の誕生日にアルパインクラブ創立150周年記念祝賀行事が開催されたツェルマットで名誉会員の認証を受けた。その折、私も日本山岳会の代表として祝賀行事に招待されていたので、ボナッティ夫妻と旧交を温めることができた。ボナッティとカシンの間、2008年に私がその榮譽に浴すことができたことは法外な喜びである。自己宣伝になるが、これでヒマラヤンクラブ、アメリカ山岳会、日本山岳会、アルパインクラブ(英国)の四つのクラブの名誉会員にして頂いたグランドスラムの榮譽は登山家冥利に尽きる。そのきっかけは、多くの方々の協力を得て日本山岳会の海外向け英文ジャーナル、ジャパニーズ・アルパイン・ニュースを立ち上げ軌道にのせることができたことであろう。

2009年2月に、アルパインクラブ(ロンドン)での認証式と講演、各地での4回の講演と友人

名誉会員認証書



訪問のため三週間のヨーロッパ旅行をしてきた。段取りを進めてくれたのは私の最も親しい友人、オクスフォード出身の現副会長のマーチン・スコット(エベレスト基金の理事長でもある)である。ヨーロッパ滞在中はすべて友人登山家の家にお世話になり、親切なもてなしを受けた。クラブ仲間の付き合いの素晴らしさをあらためて実感した。なにかんづく、ダグ・スコット夫妻が気を遣われてよく面倒をみてくれた。クリス・ボニントンもダグ・スコットの家での夕食パーティーにはご夫婦で来てくれた。以下、日記スタイルで名誉会員にかかわること、英国の登山界とアメリカ山岳会の一端をエピソードも交えて紹介する。

2月10日 - 11日 ロンドンにて

2月10日、アルパインクラブにて新会長ポール・ブレイスウエイトから名誉会員の認証書授与のあと講演「ヒマラヤの東 - チベットのアルプスと神秘の河」。司会をしてくれたマーチンは彼もビジネスマンであったせいか、私が「キセル登山家」であることを自分も引き合いにだしてユーモアを交え紹介してくれた。講演の締めはダグ・スコットが丁寧に纏めてくれた。80名参加。拙書ドイツ語版“*Die Alpen Tibets*”の出版社ペドロ・デチンもハンブルクから招待された。当日はアルパインクラブ・ライブラリーの稀覯本の展示会も催していた。重鎮ジョージ・バンド、国際山岳連盟(U I A A)元会長のマクノート・デービス夫妻(奥さんはチリー人の美人で有名)も顔を出し社交の場所にもなっていた。

ヒマラヤンクラブのヒマラヤン・ジャーナル編集長ハリシュ・カパデアは「あなたのやっている東チベット踏査は、英国人にとって一番気に入らないことだろう。自分たちこそがやるべきことだと思うだろうから。」と私に言ったことがある。それでも、英国人は業績を客観的に評価する国民性を持っている。私が名誉会員に推奨されたのは2008年6月に王立地理学協会から四つのメダルのうちの一つ、バスク・メダルを受賞したことが契機になっていると思う。バスク・メダルを推薦してくれたのが、ジョージ・バンド、アルパインクラブ前会長のスティーブン・ベナブルスとヒマラヤンクラブ前副会長のメール・メタの3人である。末尾にリストをつけるが、存命中の名誉会員は、2008年にエドモンド・ヒラリーが他界したので、2009年7月末現在でリストのとおり30名、海外の会員が多くアルパインクラブの会長経験者は少ない(リスト中のRicardo Cassinは2009年8月6日に他界した)。そのことをマーチンに訊いたところ、会長を歴任したことは名誉会員以上に名誉なことであるとのことであった。

トラベラーズ・クラブとエベレスト基金

2月11日、ロンドンのトラベラーズ・クラブにて講演。クラブメンバーのマーチンが段取りしてくれた。このクラブは1819年に創立、王立地理学協会(1830年創立)より古い歴史がある。建物の

アルパインクラブ本部にて名誉会員認証

左：ポール・ブレイウエイト新会長



右：ダグ・スコット



内部は重厚そのもの、200年前にタイムスリップしたと思うほどである。階段の手すり一つにも謂れがあり歴史が刻まれている。英国紳士のクラブでジャケット、ネクタイ着用、会長みずから挨拶にきてくれ丁寧な対応をしてくれた。講演は19世紀調の優雅な部屋で行われ、50名ほどの紳士淑女が集まった。登山家ではないのでスライドを組み換え民俗とカルチャーの間に麗峰を随所に入れて紹介した。トラベラーズ・クラブは1820年代にインドのカルカッタにベンガル・クラブとボンベイにヨット・クラブをつくった。古色蒼然としているが今でもホテルとして機能している。大英帝国の植民地経営の先兵の役割を果たしたことだろう。

王立地理学協会とアルパインクラブが1953年のエベレスト初登頂の後、遠征の収益金をと登山界に還元するためエベレスト基金が創設された。歴代の理事長はアルパインクラブの中枢の人材で、役員は同協会とアルパインクラブから半数選出されている。英国とニュージーランドの30隊ほどに毎年総額約600万円の助成をしている。対象は登

山、探検、冒険（ジャンルは多岐）、学術調査と幅広いが、パイオニア・ワークに限定される。登山の分野では未踏山域探査、初登頂、新ルート開拓が助成の要件である。このところ協会が著作権をもつ写真の使用権をめくり王立地理学協会とアルパインクラブが対立、係争に発展したが、三年間の裁判の結果最近ようやく和解に漕ぎつけた。マーチンの実務的能力に負うところが大きい。

マーチンはクライマーとしての実績・名声はないが、ここ数年間に亘り秘書長としてクラブの実務的な運営を支えてき、昨年末の総会で副会長になった。秘書長としての評価は高かった。富士通フランスの社長を務めた有能な人材である。今でもチベットや印度ヒマラヤの6,000m級の未踏峰を目指して毎年出かけている。私のロンドン滞在中はいつもマーチンの家に世話になっており、彼が一番の情報源でもある。

アルパインクラブ

スティーン・ベナブルスの後を継いだ新会長は62歳、ダグ・スコットのクライミング・パートナーの一人、マンチェスターでクライマーを雇用して高層ビルや海洋石油掘削設備などで高所作業を行う会社を営んでいる。アルパインクラブのメンバー数は約1,350人で変動はないが、若手の入会者は少なく高齢化には悩んでいる。1,350名の内、50名はジャーナリストなどのアソシエート・メンバー、200名は予備メンバー（5年後にメンバー）で、アクティブ・メンバーは1,000人である。平均年齢は50歳台半ばのようである。オクスフォードの落ちこぼれ（マーチンの言）、英国登山界のプリンス、ベナブルスは二年前に自分のエベレストに至る登山を振り返る“Higher Than the Eagle soars - A Path to Everest”を出版、文筆家としての評価は高いが、山関係だけでは食べて行けず、最近は大衆紙「サン」の依頼でディズニー・ワールドに取材にゆき連載を書いている由。

英国には350の登山のクラブがあるが、このなかにはメンバーが10-15人程度の小さな同人もある。伝統的なクラブは6つ、これを含め大きなクラブは10程度である。アルパインクラブはその頂点に立ち、その存在は大きくアルパインクライ

ミングを軸足とする歴史的な役割を果たしている。協会としてBMC = ブリティッシュ・マウンテニアリング・カOUNCIL (British Mountaineering Council)がある。日本山岳協会にちかい団体である。BMCは個人会員も2万人以上おり、個人の会費を徴収している。アルパインクラブの会員は自動的にBMCのメンバーでもある。BMCは毎冬スコットランドで冬季登攀の国際行事を開催しており、日本からも若手のクライマーが参加している。BMCは競技登山の方向に進んでいるようだが、2009年4月末に行われる会長選挙でダグ・スコットが選ばれれば流れは変わるかもしれないが、ダグ・スコットBMC会長は実現しなかった。ダグは国際山岳連盟のオリンピックを目指す競技登山には反対している。

英国登山界の人脈はアルパインクラブが支配していると言っても過言ではなく、その影響力は大きい。BMCの会長はアルパインクラブの有効メンバーであり、エベレスト基金も同じである。国際山岳連盟の会長も昨年カナダ山岳会のマイク・モーティマーが就任するまで二代に亘り長年アルパインクラブから出ている。後述するが、フランスの「黄金のピッケル賞 (Piolet D'or)」の審査にたいしても影響力を増している。アルパインクライミングの伝統を頑なに守っている。幹部連中も歳相応に現役で海外での踏査やクライミングに出かけている。

1,350人のアルパインクラブ会員のうちロンドンに住むのは20%、近郊を含めると40%、あとは地方在住である。湖水地方に多くの会員が集まっている。ボニントン、ダグ・スコットは湖水地方のペンリスの近くに住んでいる。会員サービスの一環としていろいろな催事を行っているが、ロンドンと湖水地方で登攀・踏査・研究をテーマとした講演を毎月催している。インターネットを利用した講演を毎月催している。インターネットを利用したサービスは充実している。Eメールを持っている国内海外のすべての会員には月報ニュースで該当月の行事と連絡事項を流す。コンパクトに纏められており情報として大変有用である。会報は年四回でカラーA4・20頁の登攀記録と会の活動を中心にした豊富でヴァジュアルな構成である。アルパイン・ジャーナルを毎年発行していることは言うまでもない。役員・会員の雰囲気はまさに

クラブである。昨年末の役員改正でマーチンの後を継いでフランソア・コール（フランス人）が外国人として初めて、初の女性秘書長に就任した。開明的なクラブ組織でもある。ベナブルスは次期会長候補として英国の最高の女性クライマー、ジュリー・アン・クリマを薦めていると聞いた。3年後だが実現すれば初めての女性会長が誕生する。

アメリカでもそうだが、例えば年次晩餐会のテーブルの着席を日本山岳会と比較してみると面白い。2005年12月に湖水地方で開かれたアルパインクラブ・シンポジウムで当時会長だったベナブルスの発案でテーマとして「ヒマラヤの東 - チベットのアルプス」が取り上げられ、私がキーノート・スピーカーとして招聘された。その時の年次晩餐会のメインテーブルのホストは今では伝説的なクライマー、ジョー・ブラウンであった。他にベナブルス会長、アメリカ山岳会会長（当時）マーク・リッチー、スイス山岳会会長、ダグ・スコット、クリス・ワット（現副会長）、ハンガリーからのゲスト夫妻、新任の若い女性クラブ事務員、中村であった。他のテーブルの着席はフリーであった。女性事務員をメインテーブルに着かせるところが印象深かった。

私が名誉会員に認証された2007年3月のアメリカ山岳会年次晩餐会（オレゴン州ベンド）も同じく差別のない自由な雰囲気だった。こちらも特定の招待者を除き、着席は概ねフリーで、まさにクラブ仲間同志の格式ばらないスタイルである。例えば有名なイボン・シュイナードに司会者が一言発言を求めると、どこの席にいるかわからないので探す始末で、やっと彼が手を上げて話そうとしたら、誰かが「お前は背が低くて見えないから、椅子の上に立って喋れ」と声かけたので、小男の彼はそうした。爆笑が起こった。重鎮ニコラス・クリンチは端のテーブルに座っていたので、発言の指名がされるまでどこにいるのかわからなかった。アメリカ山岳会の場合毎年晩餐会の時にオークションを行う。面白い企画であり、とりわけ和やかな空気が嬉しい。

アメリカ山岳会

107年の歴史をもつアメリカ山岳会の本部がニューヨークからコロラドのゴールデンに移ったの

は16年前の1993年である。アメリカの登山家は東部よりも中央部、西部のワイオミング、コロラド、カリフォルニア、ワシントン、オレゴンの各州に多く住んでいる。本部をコロラドに移したあと英国のアルパインクラブ的な組織・運営から方向転換し大衆化路線をとり、入会の推薦制を止め、誰でも入れるようオープンにした。その結果、1993年に1,700人だった会員は2002年には6,400人に増え、2009年は8,000人を超える。年会費は1人75ドル、財政的にはバランスを保っている。総収入に占める会費の割合は60%ぐらいで、その他は投資（4億円）のリターン、登山用具店その他からの寄付、出版物の販売、グッズの販売、広告などである。資金調達は上手である。大手の登山用具店を賛助会員にして資金的なサポートを得ているし、ナショナル・ジオグラフィックとの関係も深い。支部は12ヶ所、アラスカ、ニューヨーク、ニューイングランド、シエラネバダ、セントラル・ロッキー、カスケード、サウスウエスト、サウスイースト、オレゴン、ビルーリッジ、ミッドウエストである。

本部の3階建ての建物の立派さ、オフィスのゴージャスさ、アメリカ山岳会が誇りとするライブラリーの充実ぶり、そして12 - 13mの高さの屋内人工壁に驚かされる。この建物の名前はコロラド・マウンテニアリング・センター、オーナーはアメリカ山岳会で一部をコロラド山岳会と青少年野外センターにリースしている。素晴らしい山岳図書館はオフィスとは別になっていて、歴史・伝統・文化が融合した雰囲気を醸し出している。オフィスはゆったりしている。広い受付、IT機器が完備した専属スタッフの個室、会議室などなど、手狭な日本山岳会のルームやアルパインクラブの本部・図書室と比べると羨望のかぎりである。

本格的な図書館の機能・スペースをもつライブラリーでは3人の専属ライブラリアンが働いている。ジャーナル類は国別に整理されており、日本の『山岳』『山と渓谷』『岩と雪』など完全な形で棚に並んでいる。古今東西の書籍があることは言うまでもない。何年かかけて各国の本を英訳する計画もある。ニコラス・クリンチを通じて寄贈した故・吉沢一郎の和書1,800冊もようやく所をえることとなった。世界一の蔵書家、クリンチ自身

の本も寄贈されることとなった。ヒマラヤ 8,000 m 峰 14 座に関する全ての文献を集めたジョン・ボイルのコレクションは 1997 年に寄贈され、そのために一つの部屋が使われている。入口のドアに協力者の銘版が張られ、そのなかにアダムス・カーターやエリザベス・ホーリーとともに薬師義美の名前もある。また、重点プロジェクトの一つとして、ナショナル・ジオグラフィックの支援もえてブラッドフォード・ウオッシュバン山岳博物館が設立されている。

2009 年の春に会長が、ジム・ドニニからスティーブ・スエンソンに代わった。一線級のクライマーの系譜である。マーク・リッチー、ドニニ、スエンソンと三代の会長がカラコラムの難攻不落のラトック I 峰北壁に執念を燃やしてきた。スエンソンは坂下直枝と親しい。マーク・リッチーは日本山岳会 100 周年祝賀行事に來日、英国の仲間と 2009 年 8 月 - 9 月にカラコラムのセサル・カンリに挑む。

会長の年齢は若い。マーク・リッチーは 43 歳で就任、ドニニは就任時 61 歳で年配だったが、スエンソンは 50 歳台である。会長の選出は、第一段階で指名委員会 (Nominating Committee) が指名し、第二段階で理事会 (Board of Directors) が承認するやり方である。紛糾したこともあったようだ。会員の平均年齢は 40 歳代で若い。ただ若手の会員はベネフィットを求めたがる性向が強いようだ。

大衆化路線をとったことによる問題はできているようだが、伝統・カルチャーを老・中・青の世代間でいかに継承していくかが大事な課題で、そのために具体的に何をすべきかを問われている。一つの課題は競技登山への対応である。アルパインクライミングの伝統、その軸足を変えることはないが、競技登山がオリンピック種目に入ったとき、横目で見ていただけでいいのかという意見もある。

アメリカには登山協会や連盟はないので、アメリカ山岳会が国際山岳連盟との連携を強めている。2008 年秋からユタ州のインディアン・クリークで国際クライマーズ・フェスティバルを開催している。25 カ国から若手クライマー男女一組を招待してクライミングを通じて親睦を図る企画である。競技ではない。昨年は日本山岳会から 2 名参加し

た。2009 年秋のイベントについても 4 月に招聘状が届いている。クラブとして現在最も力を入れている仕事の一つは資料・サービスの電子化である。日本山岳会とは比較にならないほど進んでいる。住所録や膨大なアメリカン・アルパイン・ジャーナルも電子化され、会員なら誰でもアクセスできる。特定の希望者には毎月 E メール・ニュースを配信している。伝統あるアメリカン・アルパイン・ジャーナルは名編集長のアダムス・カーターの方針を引き継いで世界の登攀記録を発信し続けていて健在である。現在の編集長はジョン・ハーリン三世、1962 年にアイガー北壁のディレットシマ (直登ルート) の初登攀をドイツ隊と争い非業の滑落死をとげたジョン・ハーリン二世の息子である。

2月13 - 16日 メルボルン、北ウエールズ

13 日、ロンドンから北へ列車で 2 時間、ノッチンガムへ。英国のアルパインスタイルの旗手ミック・ファウラーが出迎えてくれた。彼の本業は生真面目な税務官、年に一回だけ 30 日の有給休暇を利用して海外の山の登攀に出かける根っからのクライマーでもある。スコットランド・ベンネビスの冬の厳しい登攀から戻ったばかりのところだった。フランスの黄金のピッケル賞を受賞した四川省・四姑娘山 6,250m 北壁の胸のすくような美学を感じさせる見事な初登攀、念青唐古拉山東部の峻峰カジャチヨ 6,447m、チベットのマッターホルン・マナムチヨ 6,267m の初登頂は私の情報提供がきっかけだった。

ミックの家族は農家を改築した大きな家に住んでいる。夕食には近くにすむ副会長のクリス・ワット夫妻が来てくれた。クリスはパタゴニアなど山の道具の輸入販売元を営んでいる。23 年前にミックとペルー・コルディエラブランカのタウリラフに新ルートを開き、最近ではカジャチヨと一緒に登っている。目立ちやがり屋ではないが実力派のクライマーです。日本でいえば坂下直枝といったところか。ミックは 2009 年 9 月はパタゴニアだが、2010 年の秋には東南チベットの未踏峰、女神の山・大米勇 (ダムヨン) に挑む。このピークの 3 方面からの写真を渡しアプローチを説明してきた。翌日 14 日にミック夫妻が次の訪問地、北ウエールズに車 (3 時間のドライブ) で連れて行って

くれた。

ウエールズでは、変わり者の登山家、ジュリアン・フリーマン・アトウッドと奥さんに会うのが楽しみだった。ジュリアンはマイペースの登山家、ヒマラヤ、チベット、南極半島、南ジョージア島、フェゴ島と活動範囲は広い。南極圏ではヨットで出かけ山に登るという英国人の趣味を実行している。自前の外洋ヨットをアルゼンチンに置いてある。ティルマンが行方不明になる直近の航海と一緒にヨットで出かけている。彼の南ジョージア島の登山記録はジャパニーズ・アルパイン・ニュースに掲載した。現在はヤルン・ツァンポー源流の山と、特にインド・中国国境の未踏峰ツイ・カンリ（インド名：ネギカンサン）に執着しているが、チベット問題が影響してなかなか中国側の登山許可が取れない。

ジュリアンに会いたかったのは別の理由があった。奥さんが大富豪ロスチャイルド家の娘で、広大な土地に居を構えていると聞いていたからである。マーチンから、ジュリアンは大金持ちだと皆言っているが、本人には訊けないのでお前（私）が行って彼の城を見てきて欲しいと言われた。ジュリアンは10年前に買ったという大牧場（850ヘクタール）を経営している。広い谷と取りまく尾根筋まで自分の土地で、大きな滝もある。住処は継ぎ足しの石造りの建物だが、大きな屋敷で、チベットから持ってきた大きな家具まである。小さな水力発電所があり、余った分は電力会社に売っている。乗馬用の馬が三頭、奥さんと娘さんと格好よく乗りまわし、ジャンプの練習もしている。奥さんに乗馬を誘われましたが、チベット馬とは違うので辞退した。

近くに住む英国きっての山岳ジャーナリスト、リンゼイ・グリフィンが来てくれた。リンゼイはアルパインクラブの役員で、エベレスト基金の助成案件審査委員長も務め、英国C L I M B誌の登山情報を担当、アメリカン・アルパイン・ジャーナルの編集も一部請け負っている。彼もオクスフォードの落ちこぼれだとマーチンは言う。気鋭のクライマーだったが、10数年まえにモンゴル・アルタイ山脈で落石事故にあり完治せず、気の毒に未だに足が不自由である。ジャパニーズ・アルパイン・ニュースをたいへん評価してくれている。

二人に私の2007、2008の東南チベット・深い浸食の国と四川の山の踏査行をパワーポイントの映像で紹介した。

ロスチャイルド家の娘・エミー（北ウエールズ）



2月16日 - 18日 湖水地方、ダグ・スコット

16日にジュリアンが4時間のドライブで湖水地方のダグ・スコットの家まで運んでくれた。天気は比較的良く北ウエールズから湖水地方までの景観の移り変わり、落ち着いた田舎の町の街並みを楽しんだ。ダグの家はペンリスの町から車で30分程のところにある。ヘスケットという古い歴史のある村である。周囲は牧場と畑、半野生の馬や鹿がいる。狐狩も行われている。奥さんのトゥリッシュに案内してもらった。16日の夜は夕食には近くに住むクリス・ボニントン夫妻、ダグ・スコット夫妻、ジュリアン、スティーブン・ゴッドウィン（アルパイン・ジャーナル編集長）の皆さんが出席し楽しいひと時だった。現在の家は3年前に再婚した奥さんと移り住んだ。彼のオフィスに飾ってあるエベレスト南西壁を登攀後東南稜でパートナーのドゥーガル・ハストン（故人）が撮った写真が印象的であった。

ダグは山の事故での傷がもとで両膝に人工関節を入れています。歩行や軽い運動には問題ないとのこと。コミュニティー・アクション・ネパールというNGOを主宰し、ネパールを舞台にボランティア活動を積極的に展開しており、現在は学校、医療など40のプロジェクトを進めている。講演活動に追われており、収益はネパールでの活動につぎ込んでいる。この他、今年は一年中断して

いたフランスの黄金のピッケル賞の審査委員長も務めている。彼の家に着いてワイングラスを傾け始めて早々に、フランスの黄金のピッケル賞に関連して2008年の日本隊の活躍は素晴らしいと話し始めた。

平出君のカメット南東壁初登攀、市村君のカーンカ北壁新ルート登攀、横山君のアラスカ・デナリでの初登攀をたいへん評価していた。登山はコンペティションではないので、オリンピックのように優勝者を決める必要はないと言い、熱っぽく彼の登山哲学を語ってくれた。したがって、2009年の黄金のピッケル賞は1隊のみにグランプリの賞を与えるのではなく、優れたクライミングを幾つか推奨するに方式を取る、すなわち日本の上記3隊を含め6隊をエクセレント・クライムとして表彰すると事前に話してくれた。行き詰まりにあった黄金のピッケル賞にダグが新風を送りこんだとフランスの当事者は喜んでいる。ダグ・スコットの最近の活躍は目を見張る。天性のクライマーである。

17日に湖水地方ペンリスのホテルで講演をした。120名以上の方が来てくれた。予想以上の入りで収益金500ポンドはダグのボランティア団体に寄贈された。私も心ばかりだが100ポンド寄付した。英国の登山家はロンドン周辺より湖水地方に多く集まってくる。アラン・ヒクスなど著名なクライマーが来てくれた。講演に先立ちダグのオープニング・アドレスは講演者への気配りをした挨拶だった。日本山岳会の創設、日露戦争、ヤングハズバンドのチベット侵攻が期せずして1905年だったと話し始めた。

マーチンは英国の最も傑出したクライマーとして四人名前を挙げた。ジョー・ブラウン、クリス・ポニントン、ダグ・スコット、ミック・ファウラー。ジョー・ブラウンは他の三人に比べて出たがり屋でないが英国では最も尊敬される伝説的なクライマーである。彼の家は裕福でなく工具として働き始めた。クライミングが好きでも道具を買う金がないので、洗濯物を干す紐をロープ代わりに使った。1955年のカンチェンジュンガ隊のメンバーとして初登頂しているが、その時初めてノン・エリートジョー・ブラウンがメンバーとして選ばれたと言われている。アルパイ

ンクラブは彼を名誉会員に選んでいる。今回の旅では彼には会えなかったが、3年前のシンポジウムで席を共にし、以後、クリスマスカードなどには必ず返事をよこす律儀な人である。

ダグ・ハウス：右からクリス・ポニントン、ステーブ・ゴッドウィン、ダグの奥さん、中村、ダグ・スコット、ジュリアン



2月18日 - 27日 ケンブリッジ、ダブリン、ハンブルク、チュウリッヒ

18日にペンリスから特急列車(3時間)でロンドンに戻り、ロンドンからケンブリッジ・エクスプレス(45分)に乗った。ケンブリッジではいつものようにヘンリー・デイが迎えてくれた。ヘンリーは現在アルパインクラブの役員で、ケンブリッジ出身の退役大佐。英国陸軍登山隊で何度も海外に遠征、1970年にはアンナプルナI峰の第2登を行っている。2010年はアンナプルナI峰初登頂60周年、第2登40周年を記念して王立地理学協会がシンポジウムが行われる。90歳を越えるモリス・エルツォーク、南壁を初登攀したポニントンも参加する。

19日の夜、ケンブリッジ大学で講演をした。ヘンリーはジョージ・バンドとともにケンブリッジ大学山岳部OBの重鎮である。今回の講演もヘンリーが準備してくれた。出席者は学生、若者を中心に約50名だったが、質疑は活発だった。ケンブリッジ大学山岳部の現在のアクティブ・メンバーは30名ぐらいとのこと。ケンブリッジのカレッジ、教会の古い町並みはいつ行ってもいいところだと感じる。ヘンリーは奥さん共々旅行好きで、2年前に愛車ランドローバーを駆って南北アメリカを

縦断している。2009年はロシアから天山に愛車で入る計画を持っている。

22日ロンドンからダブリンに飛んだ。数年前に米国アリゾナのフラグスタッフで開かれた国際山岳連盟年次総会で親しくなったダブリン在住のジョス・ライナムからの講演依頼による。ジョスはすでに84歳でお年寄りになっていた。2月21日夜、ホテルのいい部屋に70名ほどが参加してくれた。講演の主宰は1969年創立のマウンテニアリング・カウンスル・オブ・アイルランド(MCI)。アイルランドには、山岳クラブとしてはジョスも創立に係わったアイリッシュ・マウンテニアリング・クラブ(Irish Mountaineering Club 1949年創立)があり現在250名ほどの会員がいる。ダブリン住宅街の瀟洒な家で老夫婦と静か時を過ごした。心に沁みる再会だった。

22日にロンドン経由ハンブルクに入った。拙書ドイツ語版“*Die Alpen Tibets*”の出版社ペドロ・デチン及び四川省の部の共同執筆者マイケル・ブランターと英語版の打合せをした。英語版は3分冊とし範囲も四川・青海省まで広範にカバーする。松本征夫先生の揚子江源流の山塊、北村昌之のメコン川の源流踏査と下降も含める。第1巻目は「念青唐古拉山東部と崗日嘎布」で2009年半ばに出版を予定している。その後引き続き半年ごとに出す。題名も“*Alps of Tibet and Beyond*”を考えている。ペドロの本業はケルン大学出身の精神科医で本の出版と二足の草鞋を履いている。人格、見識、能力いずれも傑出した逸材である。奥さんも精神科医である。彼にめぐり合えたことは私にとって幸運である。ペドロの家では盛大な天麩羅パーティーをした。日本から天麩羅粉、つゆなど持参した。ハンブルクは新鮮な海老、ホタテなど豊富である。目の前で揚げて食べてもらうやり方でいたく喜ばれた。

25日にチューリッヒに移動した。ヒマラヤン・ジャーナルと雲南省徳欽のガイド陳小紅がチューリッヒ在住のクリスチャン・フレイと私を結びつけてくれた。山の世界も「World is small」、陳小紅は私が育てたガイドである。ヒマラヤン・ジャーナルに載った私の梅里雪山巡礼路一周(1996年)の寄稿を読んだクリスチャンが2000年に陳小紅を使って巡礼路を一周した。四川省のミニヤ・コ

ンカと貢嘎雪山のトレックにも陳小紅と出かけている。クリスチャンはスイスの大手投資銀行UBSのアナリストで、山岳ガイド組合のメンバーでもある。奥さんは漢族だがウルムチ出身、新疆山岳協会で働いていた。お二人の好意に甘えてスイスでの休日を楽しみ三週間のヨーロッパの旅を終えることができた。多くの仲間のお陰である。

存命中のアルパインクラブ名誉会員リスト (30名) 2009

HIS ROYAL HIGHNESS PRINCE PHILIP, DUKE OF EDINBURGH, KG

GAND, George CBE

BLACKSHAW, Alan

BONATTI, Walter (2007)

BROWN, Joe

CASSIN, Ricardo (2009)

CHOUINARD, Yvon

CLINCH, Nick

DESTIVELLE, Catherine

DIEMBERGER, Kurt

GOMBU, Nawang

GREGORY, Alfred

HARDIE, Norman

HERZOG, Maurice

HOUSTON, Dr. Charles

INNES, Hamish Mc (2009)

JONES, Emyln

KAPADIA, Harish

KURTYKA, Voytek

LAWFORD, Robert

LOWE, George CBE CNZM

MESSERLI, Bruno

MESSNER, Reinhold

NAESS, Prof Ame

NAKAMURA, Tamotsu (2008)

RUTHVEN, William

SABIR, Nazir

SANDHU, Bahwant

WESTMACOTT, Michael

WYLIE, Li Col Charles, OBE